様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：３２６６０
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2014
課題番号：２２５２０３２８

研究課題名（和文）シュトゥルム・ウント・ドラングとヨーロッパ文化史――越境する文学の影響圏

研究課題名（英文）Sturm und Drang in the history of European culture

研究代表者
今村　武（Imamura, Takeshi）

東京理科大学・理工学部・准教授

研究者番号：６０３８５５３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：研究成果は次の三点に集約できる。（１）専門用語「シュトゥルム・ウント・ドラング」のドイツ文学史における定義を明らかにした。戯曲のタイトルがその後時代概念として使用された過程も説明した。（２）「シュトゥルム・ウント・ドラング」はドイツ文学にのみ固有な現象であるというドイツ文芸学における従来の見解を払拭した。美術、音楽、オペラ舞踊、英文学、仏文学などにおける同時的な類似の革新現象と比較検討し、それは可能となった。（３）辺境、コロニー、被占領地域、外国における近代ドイツ文学の萌芽を検証した。本研究の成果は、１８世紀後半のヨーロッパにおける文化的革新を目指す諸作品の連関を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The results of this study can be summarized in the following three points. (1) The definition of the terminology “Sturm und Drang” in the history of German literature is clarified. This study describes how the Sturm und Drang was used as the title of a drama at first, and then used as the concepts of the era. (2) The traditional view in Germany literary science, “Sturm und Drang” is a unique phenomenon only in German literature, does not match historic facts. A similar innovative group of works was also created in fine arts, music, opera, dance, English literature and French literature. This research compares and contrasts those works with dramas of Sturm und Drang. (3) The signs of modern German literature in frontiers, German colony areas and foreign countries are investigated. This research clarifies the linkage of the group of works aiming at cultural innovation in the late 18th century Europe.

研究分野：外国文学（独）

キーワード：ドイツ文学　ヨーロッパ文化史　シュトゥルム・ウント・ドラング　文学史　美術史　音楽史

１．研究開始当初の背景

戯曲作品のタイトル名『シュトゥルム・ウント・ドラング』が、1770 年代を指す文学史的時代概念として定着するのは 18 世紀の同時代から、19 世紀前半である。同時にゲーテの証言（『詩と真実』）から、疾風怒濤の文学は、社会的基盤を持たない文学的な革命、美学的・人間的な成長の準備段階として位置づけられる。

その後ドイツ文芸学においては、1960 年代の学生運動とも連動し、ゲーテ・シラーによる古典主義文学を頂点とする文学史観に対する疑義が表明され始めた。それを契機に古典主義の準備段階としてのシュトゥルム・ウント・ドラングも、社会批判性を重視する見地から再評価され始めた。

さらに、20 世紀の 80 年代より活発化するシュトゥルム・ウント・ドラングの詩人と作品の研究が進行する中で、ドイツ古典主義文学を創造し得たゲーテとシラーの対極に位置する詩人ヤーコプ・レンツが着目されることになった。

世紀転換期からのレンツ研究の進展とその影響から、古典主義を頂点とする旧来の発展史的文学史観を覆し、多様性を評価する機運が芽生え、さらに美術史、音楽史、英仏伊文学等の他分野にまたがる学際性が指摘され始めていた。しかしながら、シュトゥルム・ウント・ドラングを学際的な視点からアプローチする研究は皆無に近い状態であった。

本研究計画を立案するにあたり、下記の三つの研究分野の問題点を解消することをその目的に含めることとした。

第一に、「シュトゥルム・ウント・ドラング」を再定義する必要性があるにもかかわらず、旧態依然とした「準備段階」あるいは「反合理主義の文学」という文学上の時代概念が、音楽史や美術史といった関連諸分野において恣意的に用いられている現状を打開できていないこと。

第二に、ドイツ文芸学における緻密な文献学的研究が欠如しているために、多くの芸術諸分野における 18 世紀後半の同時多発的な革新的現象を説明しうる様式概念「シュトゥルム・ウント・ドラング」を提出するに至らず、ヨーロッパ文化史研究における地歩を築くことが出来ないこと。

第三に、比較文学・文化的視点を欠いた狭い枠内でのみ研究を遂行してきた結果、シュトゥルム・ウント・ドラング研究の内包する辺境・コロニー・被占領地域の言語と文化、文化的越境性、啓蒙の先鋭化、をキーワードとする新しい学際的な研究領域開拓の可能性が阻害されていること。

本研究の対象「シュトゥルム・ウント・ドラング」について、以上のような研究領域での問題点を掲げ、計画の企画立案・遂行に着手することとなった。

２．研究の目的

産業革命と市民革命との狭間に興るドイツの「文学革命」としての「シュトゥルム・ウント・ドラング」を研究対象とする。そして本研究はこのシュトゥルム・ウント・ドラング文学が、辺境で萌芽し、コロニーにおいてその実践領域を確認し、ドイツではない外国（被占領地域）において展開する事実を問題領域とし、シュトゥルム・ウント・ドラングの代表的作品群の文献学的研究成果を、英仏文学・音楽・美術にまたがるヨーロッパ文化史と比較検討し、この時代概念をより広義の様式概念として再定義する。

社会的変革と、啓蒙による精神的覚醒を背景として、地域、ジャンル、言語を越境する革新的傾向を持つ芸術作品群の、ヨーロッパの広範囲における同時的な成立との関連を文献学的、比較文化史的観点から明らかにし、学際的な新研究分野を確立することが、本研究の目的である。

３．研究の方法

本研究は、研究代表者一人によって遂行された。研究目的「文献学的概念史研究による新研究領域シュトゥルム・ウント・ドラングの確立を遂行するため、5 か年の段階的研究計画とし、各段階に主たる研究対象範囲を設定して計画的かつ効率的な研究遂行に努めた。各々重複する担当範囲を設定し、研究の進捗状況に合わせ適宜調整した。

平成 22 年度の研究開始以降、以下のテーマ群を年度毎に追求することで、本研究計画の里程標とした。シュトゥルム・ウント・ドラングに関して「様式概念の定義」、ドイツの周辺国としての「デンマーク」及びドイツ語圏の中の「スイス」、文学との関連からの「音楽史」及び「美術史」、文学と芸術における「啓蒙主義の摂取」、啓蒙の都市としての「ケーニヒスベルク」、ドイツ文学との関連から再考する「イギリス文学」、18 世紀ドイツにおける「啓蒙の実践と文学」、ドイツ人入植地域「バルト海沿岸地域」、研究領域としての「植民地と周縁地域の文化史研究」、シュトゥルム・ウント・ドラング詩人の文学以外の活動領域としての「言語と教育と政治」、文化的政治的摩擦地域としての「アルザス・ロレーヌ」、18 世紀後半以降の「文化的ナショナリズム」と「祖国とコロニー」、ドイツ古典主義文学成立以前の「ヴァイマール」、ゲーテ的視点を考慮しての「シュトゥルム・ウント・ドラングの典型と例外」。

18 世紀ドイツ文学研究の泰斗であるオルデンブルク大学デーリング教授との緊密な連携を保ちつつ研究を進めることで、本研究計画に対し常に第三者有識者からのアドバイスを得ることができた。

さらにロンドンに保管展示されているシュトゥルム・ウント・ドラングの詩人・画家であるフュスリの作品（詩と絵画）についての論考を発表したことは、本研究計画の学際

的成果の一端であると考えられる。また美術・絵画分析についての方法にも一定の知見を得た。

４．研究成果

第一に「シュトゥルム・ウント・ドラング」の戯曲タイトルから時代概念への変遷過程を文献学的方法により解明した。その際、ドイツ文学史における意味内容を明確に記述することができた。

次に、ドイツ文芸学に根強く残るシュトゥルム・ウント・ドラングはドイツ文学にのみ固有な現象であるとの従来の見地に疑義を呈し、美術、音楽、オペラ、舞踊、英仏文学における同時的な革新運動との関連性を検討して、様式概念としての「シュトゥルム・ウント・ドラング」を学会発表、論文その他の媒体を通じて提案した。学際的な新たな研究分野としてのシュトゥル・ウント・ドラング研究を遂行した。

第三に、「辺境」「コロニー」「ドイツ人入植地域」「被占領地域」「外国」における「ドイツ文学」の展開を検証し、18 世紀後半のヨーロッパにおける文化的革新を目指す諸作品と、地域文化研究を統合する視点を提供した。従来のシュトゥルム・ウント・ドラング研究にはなかったキーワードを新規に導入することにより、ケーニヒスベルク、バルト海沿岸地域、デンマーク、スイス、アルザスを貫くシュトゥルム・ウント・ドラングの全体像を全く新たに説明できる視点を導入した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

① 今村　武 Das Erzählte und das Erinnerte im ‚Verwundeten Bräutigam' von Lenz. In: Tokyo University of Science. Studies in Liberal Arts and Sciences. Number 43 (2010),査読有 S. 209-221.

② 今村　武 Bodmer und Füßli in Zürich. Zur Geschichte der Sturm-und-Drang-Literatur in der Schweiz. In: Tokyo University of Science. Studies in Liberal Arts and Sciences Number 44 (2012), 査読有 S. 1-20.

③ 今村　武 Das Baltikum und die Sturm-und-Drang-Literatur. In: Transkulturalität – Identitäten in neuem Licht. Asiatische Germanistentagung in Kanazawa 2008. Herausgegeben von Maeda Ryozo im Auftrag der Japanischen Gesellschaft für Germanistik und in Zusammenarbeit mit dem Redaktionskomitee des Dokumentationsbandes der Asiatischen Germanistentagung 2008. München 2012, 査読有 S. 336-342.

④ 今村　武 Johann Heinrich Füssli und William Blake – Ihre Kunst und die Gordon-Aufstände. In: Tokyo University of Science. Studies in Liberal Arts and Sciences Number 45 (2013), 査読有 S. 183-193.

⑤ 今村　武 J.M.R. Lenz' Aufklärungsprojekte im Elsass. In: Tokyo University of Science. Studies in Liberal Arts and Sciences. Number 46 (2014), 査読有 S. 115-125.

⑥ 今村　武 Zur Shakespeare-Rezeption in Deutschland des 18. Jahrhunderts. In: Tokyo University of Science. Studies in Liberal Arts and Sciences. Number 47 (2015), 査読有 S. 63-75.

〔学会発表〕（計 11 件）

①今村　武、ゲルステンベルク『ウゴリーノ』―疾風怒濤最初期のダンテとシェイクスピア受容（日本独文学会、2010 年春期研究発表会、慶応義塾大学日吉キャンパス（神奈川県）、2010 年 5 月 30 日）

②今村　武、ゲーテ『親和力』における姦通と聖女（比較文化研究会、第 10 回定例研究会、東京理科大学神楽坂校舎（東京都）、2010 年 6 月 12 日）

③Takeshi Imamura, Zur Sturm-und-Drang-Literatur im Baltikum. (XII. Kongress der Internationalen Vereinigung für Germanistik: Vielheit und Einheit der Germanistik weltweit. Universität Warschau, 30. 07. – 7. 08. 2010. Sektion 37: Erzählte Geschichte – erinnerte Literatur, 31. Juli 2010)

④今村　武、ボードマーとフュスリ――スイスの疾風怒濤（日本独文学会、2011 年秋季研究発表会、金沢大学角間キャンパス（石川県）、2011 年 10 月 15 日）

⑤今村　武、クライスト「チリの地震」における錯綜する人間関係（日本人間関係学会、第 19 回大会、文学と人間関係部会自主シンポジウム「グロテスクと人間関係～危難の時の人間関係～」岡崎女子短期大学（愛知県）、2011 年 11 月 20 日）

⑥今村　武、ヘンリー・フューゼリとウィリアム・ブレイク――危難の時代の文学と絵画（日本人間関係学会・文学と人間関係部会、定例研究発表会、東京理科大学神楽坂校舎（東京都）、2012 年 6 月 16 日）

⑦今村　武、ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ『親和力』における危機的状況と詩的昇華（日本人間関係学会 20 周年記念大会、文学と人間関係部会自主シンポジウム「危難の時の人間関係−文学作品から人間関係を考える」仙台白百合女子大学（宮城県）、2012 年 9 月 23 日）

⑧今村　武、絵画における疾風怒濤の一系譜―フュスリとフューゼリにおける独創性を中心に（日本独文学会、2012 年秋季研究発表会、中央大学多摩キャンパス（東京都）、2012 年 10 月 14 日）

⑨今村　武、スイスの疾風怒濤とイギリス初

期ロマン派の成立（日本人間関係学会・文学と人間関係部会、定例研究発表会、東京理科大学神楽坂校舎（東京都）、2012 年 10 月 27 日）
⑩今村　武、ハインリヒ・フォン・クライスト「チリの地震」の社会史的背景（日本人間関係学会・文学と人間関係部会、定例研究発表会、東京理科大学神楽坂校舎（東京都）、2013 年 1 月 26 日）
⑪今村　武、ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ『ファウスト　第１部』における「赦し」と「救い」の予兆（日本人間関係学会、第 22 回全国大会、文学と人間関係部会自主シンポジウム「文学における危難の時の人間関係～「赦し」と「救い」にいたるまで～」聖カタリナ大学（愛媛県）、2014 年 10 月 26 日）

〔図書〕（計 1 件）
① 今村　武、南窓社、『近代ドイツ文学の萌芽と展開』2012 年、268 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
今村　武（IMAMURA，Takeshi）
東京理科大学・理工学部・准教授
　研究者番号：60385531

(2)研究分担者
（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：